

## 「好き」が導く多様な体験

花や虫が大好きな4歳児のJさん。「好き」を軸に生活するJさんとの春から初夏にかけての日々の中で、Jさんがどんな体験をしているのか、保育者が好きに寄り添うために必要なことは何か、保育者としてのまなざしや関わり方を改め見つめ直すきっかけになりました。



### 他者とのつながり

Kさんが幼虫を捕まえてJさんに渡したことをきっかけに、JさんとKさんは一緒に虫を探すようになった。言葉のやりとりは少ない2人だったが、真剣に虫を追いかける中で、互いの存在に居心地のよさを感じているようだった。それまで「虫」がJさんの「好き」だったが、新たに「Kさんと一緒に虫を探すこと」もJさんの「好き」に加わっていった。



### 身体の動き

虫網を手にチョウを追って園庭を走り回るJさんの姿があった。これまで花を摘んだり、虫を集めたりして静かにしゃがんでいることが多かったJさんが、チョウを追う場面では全身を使って動き回っていた。

花を摘むときの静かな動きと、虫を追いかけるときの躍動感。「好き」という気持ちが、身体の使い方や空間との関わり方にも影響していることが感じられた。

### 道具の面白さ

6月中旬、クレヨンでいろいろな模様を描く遊びを紹介した。Jさんは最初参加しなかったが、周りの友達が様々に模様を描くクレヨンの音に惹かれるように少しずつ机に近づき、クレヨンを取り、紙いっぱいに黄色いヒマワリを描いた。5月の末にヒマワリの種をクラスで花壇に蒔いていた。Jさんは毎朝登園してくると、葉の数を数えて生長を見たり、水をあげたりしていた。まだ花が咲く前だったが、楽しみにするJさんの気持ちが表れた絵だった。



Jさんの姿から、「好き」に寄り添うことが、他者とのつながり、身体の動き、道具の面白さとの出会いなど、さまざまな体験につながっていくことを実感しました。こどもが今、夢中になっていること、そのひとつの「好き」や「楽しい」を、保育者が見取り、そばで支えていくことで、育ちは広がっていきます。こどもが何に夢中になっているのか、こどもの中で何が起きているのか、保育者の目を磨いていくことが大切だと考えます。 (岸 拓実)